SMロマン小説

乱舞

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど　ＳＭ雑誌に「仲ゆうじ」名でＳＭ小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにゃふにゃ」「あんぷらぐど」名でＳＭ小説を執筆。独自の自虐的ＳＭ、一人称による告白形式の作品、伝奇ＳＭ小説などを発表し続けている。東京在住。

目次

初心　5
苦悶　148
山荘　362
奥付　498

本書は『乱舞　被虐ＯＬ珠々華』として「荒縄工房」に連載した作品を加筆修正し、改題したものです。

初心

その娘を最初に目撃したのはエレベーターの中だった。同じビルにいるＯＬだということはわかったが、それだけのことだった。自分の会社の人間ではない。接点はない。

十二月のはじめ、軽い自損事故を起こし、フェンダー周りを修理することになったことから、十年ぶりぐらいに電車での通勤をはじめた。代車を運転するのがどうしても気に入らなかったので、へそ曲がりな性格もあってラッシュに飛び込むことにしたのだ。

ＪＲならグリーン車がある。だが、この路線にはそんな車両はない。レディースカーはあるが、ラッシュ時はどの車両もレディースカーのようなものである。

そこに彼女がいた。私の目の前で、吊革につかまり、耳にイヤホンを入れていた。白いコードが胸元に下がっている。小柄。華奢。それでいてスーツとコートに包まれた乳房はしっかり膨らんでいる。

小さな顎。小さな耳。ピアスはしていない。髪は背中に少し落ちるぐらいの長さで、前髪のカールと、耳にかかる部分のカーブ、そして襟足のカーブがそれぞれ違う。クセなのか、毎朝、そうなるようにセットし

ているのかわからない。
染めていない黒い髪は、そのままでは重くなってしまうところを、微妙なクルンとした毛先によって救われている。
もっとも気になる理由は化粧の薄さ。肌が白いことはのど元や手を見ればわかる。生まれてから一度も太陽の下に置かれたことがないかのようだ。
口元をきゅっと結ぶ。目を閉じて音楽を聴く。その姿に珍しく鼓動が激しくなる。ふっくらとした唇には薄いルージュが似合う。
以前に見かけた娘だと思うのだが、確信は持てず、

多くの人と一緒にホームに吐き出され、エスカレーターの列に並んでいると、彼女も降りて階段を軽快に上がって行くのが見えた。

好奇心に負けて、歩く人の側へ割り込み、エスカレーターを上がると改札で追いついた。尾行ではない。同じ方向に歩いている。

ブーツだ。しっかりと大股で歩く。健康そのものだ。改札を抜けるとバッグからストールを取り出して肩から掛け、寒風に小さな鼻をツンと向けて、勢いよく歩いている。こちらは少し息が切れている。

間違いない。同じビルのロビーに入っていく。セキ

ュリティーカードをかざして警備員のいるゲートを通った。

彼女は低層階用エレベーター。私は高層階用エレベーター。列が違う。そこで役員たちに出くわし「遅いな」と言われた。クルマで通っているときは朝一番で来ていたからだ。

小顔。その上、つるんとした子どものような顔立ちで、真っ白だから、エレベーターで乗り合わせただけなのに記憶してしまったのだ。誰かに似ている。私の好きな誰かに。

ここまでなら、通勤時のちょっとした楽しみで終わ

ただろう。
偶然はさらに続いた。彼女がうちの会社にやってきたのである。派遣社員だった。総務部に入ってきたのである。
名前は珠々華（すずか）だとわかった。華やかな名前だ。当人のイメージはおとなしく陰がある。しかし、悪くはない。その名を知って、ますます興味がわいた。通勤時とは違い、笑顔の彼女を社内で見かけることが増えて、とても得をしたような気になっていた。
ここまできたら、偶然を必然にしなければ。
私ははっきりと彼女のことを意識した。三か月単位

の契約で職場を移ってしまうかもしれない彼女。たまたま同じビル内で派遣先が変わったわけだが、次はまったく違う会社へ行ってしまうかもしれない。あの電車にも乗らず、二度と会うこともないかもしれない。

その前に、なにかしら結論を出したい。ただし社内にいる以上、部署は違っていてもマズイ事態にはなりたくない。セクハラ、パワハラは汚点でしかない。

「君とあろうものが」と役員たちに笑われるだろう。

「片道キップで外に出てもらう」と。

とはいえ、それ以上に関係を深める手掛かりはなく、そんな状態がしばらく続いた。

十二月十三日。部署ごとに忘年会があり、私は三つの部署を掛け持ちした。役員から声がかかれば断れない。総務部にも顔を出したが、そこに彼女はいなかった。派遣社員も招待しているはずだが、正直、がっかりした。

ひと通り顔を出したあと役員たちと新橋にあるバーに行った。古い雑居ビルの二階にある、名も思い出せないような小さな店だ。

彼女はそこにいた。カウンターの向こうで氷を用意したり、グラスを洗ったりしていた。地味な服装だ。ホステスのようなことをするのではない。それとなく

ママに聞くと、手伝いで頼んでいるという。
「学生時代にもここでアルバイトをしていたから」と初老のママが言う。「キレイなんだから接客をやれば何倍も稼げるのにね。嫌なんだって。人と話すのが苦手らしいの」
うぶな女だと見えたが、なにかしらおもしろい過去がありそうな気がした。ますます興味がわいてくる。
考えてみれば、通勤電車で一緒になるのだから、家の方向は同じだ。帰りに尾行するほど暇ではないが、今夜はチャンスかもしれなかった。
役員たちは明日ゴルフで早いからと、次々にタクシ

ーで帰っていった。私は見送り役だ。終電まで一時間以上ある。

「ラストオーダーだけど、もう一杯、飲む？」

金曜の夜なのに、周囲で大混雑している店も多い中、そのバーは客がいなくなった。看板の火を早々に落としているからだ。

「珠々華ちゃん、もういいわよ。遅いから。助かったわ」

ママが茶封筒でバイト代を直接渡した。

「すみません」と彼女が言う。

「来週もこれる？」

「はい」
帰り支度をはじめる珠々華。いましかない。私は勇気を出す。
「珠々華さん。うちの総務にいるよね？」
「え？」
視力の弱い女性特有の焦点の定まらない目。だが、瞬時に彼女は私を認識した。頬がピンク色になった。
「すみません」
「謝ることはないよ。忘年会をすっぽかして、ここに来ていたんだね」
困ったような表情。それがまた私の中枢神経に突き

刺さる。
「いいんだ、そんなことは。それより帰るなら送っていくよ」
彼女の頬がピンクからバラ色になっていく。
「知ってる？　同じ電車でさ。朝」
「はい」
ドキっとした。多少酔った勢いでバカなことを言ったと思っていたのに、彼女はストレートに返してきたのだ。
「まあ、そうなの？　じゃ、送ってあげてちょうだいよ。そのほうが安心だわ。最近はストーカーとか物騒

だから……」
自嘲的に笑う。実は私もある意味、ストーカー的に彼女をマークしていたのだから。
私はママに信用されている。役員にも信用されている。多くの社員からも信用されている。そういう仕事をしているから。
「じゃ、途中まで一緒に帰ろう。ママ、タクシー呼んでくれる？」
これがきっかけだった。彼女は私の住む街の隣駅のアパートに住んでいる。一人暮らしのようだが、立ち入ることはしない。

かなりのことがわかったので、私はうれしかった。
それだけではない。タクシーの後部座席では端と端に離れ、ドアに肩をつけ、距離を保っていたのだが、彼女が私に好意を持っていることだけはわかった。
それは彼女のテクニックなのだろうか。それとも本当に初心(うぶ)なのか。学生時代から新橋のバーでアルバイトをしていて初心なはずがない。それでも、そう見えてしまう。魔性とでも言うべきだろうか。
彼女とはタクシーの中で音楽の話をした。彼女がいつもイヤホンで聞いている音楽である。そのコンサートが明日、あるという。

「チケットが取れなかったんです」
酔っていた私は「コネで用意できるかもしれない」と安請け合いをし、彼女は自然に電話を教えてくれた。
コネは高いものについたが、アリーナ席を二つ用意できた。翌日、彼女とデートした。私は独身だし、彼女も独身。年齢は離れているもののデートをしても悪いことはなにもない。
アンコールを含めて十時近くまでコンサートが盛り上がり、その勢いで私の知っている店でワインを飲んだ。彼女は音楽の話をした。
記憶にあるどの女性にも似ていないのに、どこか遠

くの記憶に触れる。そのせいで彼女が欲しくてしょうがなかった。

最初のデートだというのに、帰りたがらない。まるで人懐っこい猫のようだ。

さりげなく甘えてくる彼女の態度から、すべての信号が青に違いないと私は解釈した。トイレに行きがてら、会社でいつも利用しているホテルに連絡すると当然、部屋は用意されていた。

彼女と歩いてホテルに入った。駅から少し離れた一流ホテルで、クリスマスのイルミネーションに飾られていた。

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇一四年十月刊行　第一版　二〇一六年七月ＰＤＦ修正

著作権　あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房　ＳＭ研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。